専修大学卒業生へのアンケート調査
(「経営発展と専修大学」プロジェクト報告)

齋藤　憲，加藤茂夫，馬塲杉夫，廣石忠司，奥村経世

1．はじめに

本報告は，「経営発展と専修大学」プロジェクトの第一報告であり，その内容は，2006年7月に実施した専修大学卒業生へのアンケート調査のまとめである。そこで先ずアンケート調査に至る過程と，その内容について述べておきたい。

「経営発展と専修大学」なるプロジェクトがスタートしたのは，2年前であり，我々の勤務する大学の社会的な意味をよく知りたいと考えたからである。

そのような思考の前提には出生率の低下にともなう受験生の減少があり，それによる競争の低下がもたらした本学学生の幼児化，未成熟化があった。ただしこれは本学独自の問題ではなく，日本の大学生に共通する社会的な問題であった。学会等で他大学教員と会話を交えると，大学生に共通する話題であることが明らかである。

他方，日本経済の高度化にともなって，社会が求める大学卒業生の質も一層の高度化が問われるようになった。とりわけ日本経済発展の担い手となった企業からは，アメリカやヨーロッパの大学卒業生と同等，ないしはそれ以上の質が求められ始めた。というのは，現在の多国籍化した日本企業にとっては，大学卒の日本人は，そのまま管理者たりうることが必然とされるようになったからである。ありていに言えば，先進国でも有数の高賃金に見合う能力を求められたことになる。つまり学生が幼児化してないとしても，大学はさらなる教育の向上を要請されたわけで，特に経営学部にはそれを求められたことになる。

加えて社会のグローバル化やそれにともなう変動の大きさは，大学入学時の偏差値で卒業生の能力を確定できないことになった。1980 年代以前は，市場規模は拡大を続けたものの価値観や知識は定常化していたから，社会や企業の将来は充分に想定可能であった。つまりどの大学でも同じ教育を施し，どの偏差値の学生にも同じ＋α を与えて，社会や企業に送り出せばよかった。大学の偏差値は，卒業生の能力を測りうる基準たりえた。大学で何を学んで来たかよりも大学の名前の方に比重があったのは，そのような理由からであった。しかし社会がグローバル化した結果，日本という閉じられた社会の偏差値など，普遍性を持たないか，持ったにしても僅かな時間だけになった。つまり大学教育の重要性を著しく高め，どの大学を出たかよりも，大学で何を学んだかの方に比重が移って来たのである。

このような時代にあって，専修大学はどうすべきなのか，特に経営学部はどうすべきなのか。他大学の経営学部と質的に異なる教育は，どのようにすべきなのか。幸い本学は多くの企業人を輩出しており，それらの人々は身を持って日本の経済成長と激動を体験しており，彼らの学んで来たことはそのまま我々が求める解答になるはずである。そう考えて，今回のアンケート調査になったわけである。

そこでダイヤモンド『会社職員録』[1] に記載されている専修大学卒業生 633 名を選び出し，会社宛にアンケート用紙[2] を郵送した。発送は 7 月中旬に行い，8 月中に回収した。刊行の関係で 2005 年版を用いたために退職者や不明者が相当数の人数となり，実際には約 600 名のアンケートとなった。

回収されたアンケートは 180 通であり，したがって回収率は約 30% であった。このようなアンケートの回収率としてはかなりの比率であり，卒業生の意見を反映させるには十分な回収率といえよう。本報告は，その定量データ分析の概要である。定性データについては次回，報告することとしたい。

アンケートには，加藤茂夫経営研究所所長および齋藤憲研究会代表連名で，「専修大学を卒業して，実業界で活躍している皆様へ」なる文章を添えた。プロジェクトの意図が明らかになるので，以下全文を掲げる。

「専修大学を卒業して，実業界で活躍している皆様へ」

初めてお便り致します。専修大学は，2009年に創立130年を迎えます。その間日本経済は紆余曲折を経て発展してまいりましたが，それに合わせて本学も成長してまいりました。戦前の企業等の古い資料を紐解きますと，事業の拡張のために明治大学や法政大学とともに専修大学の学生を雇い入れたという記録が出てまいります。戦後の歴史を顧みましても同様の事実を見て取ることができます。それは東京大学のような官学とも，また早慶等の大学とは異なった意味ですが，本学は，明らかに歴史の一端を担って130年の軌跡を描いてきたと考えることができます。戦後の経済発展にしぼって見ても，急激な質・量双方の拡大を可能にしたのは，本学を含めた中堅大学の力量だったと考えられます。

しかし，少子化にともなう中学・高校での競争の欠如は，教育政策の失敗とも共鳴しあって大学生の質を落とし続けてきました。残念ですが，それは本学の学生にも現れています。

そこで経営研究所では，実業界の中核を担っている皆さんにアンケートを行い，皆さんの体験や苦労をまとめて記録に残し，あるいはヒアリングに応諾してもらって，生きた教科書を作成したいと考えました。現在の学生は，経営理論と実際との乖離を埋めることが上手ではありません。自分達の先輩が体験した，あるいは考えた，ということであれば，それだけで彼らは関心を示します。その関心に依拠して乖離を埋めさせることができれば，と考えています。アメリカの経営教育の手法にケース・スタディがありますが，本学の学生には本学の先輩のケースを勉強させるということでしょうか。また経営学は実学ですから，実際に実業界で働く皆さんの声は，大きな価値を持っています。それを学部や大学院のカリキュラムにも反映できます。

以上のように考えました経営研究所では，『ダイヤモンド会社職員録』から本学出身の役員・管理職を選び，アンケート調査をすることに致しました（2005年版を用いたために役職等に相違のある場合は，お許しください）。お忙しいことは重々承知致しておりますが，夏休み中に集計をしたいと考えておりますので，7月22日までにお返事頂けますと誠にありがたく存知あげます。本学の前進のためと考えて，ご協力くださいますよう，切にお願い致します。

それでは本題に入り，定量データ分析の概要を述べて行こう。

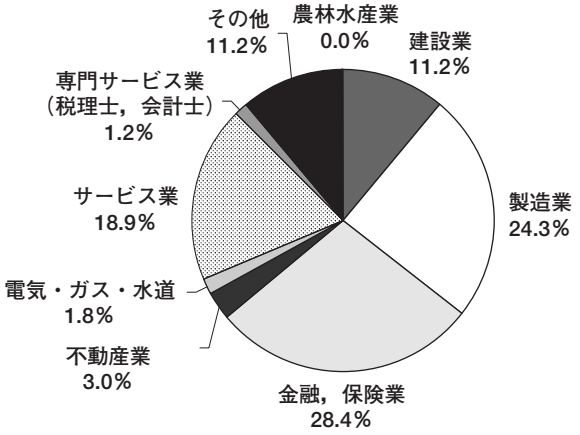
2．アンケート調査

⑴　回答者について

⑴ー1　回答者が勤務している業種

回答者が勤務している業種は，図⑴－1のとおりであった。金融保険業が28.4%と最も多く，次いで24.3%の製造業，18.9%のサービス業，11.2%の建設業と続いている。非製造業の占める割合が多く，回答にはその影響が出ていることが予測される。

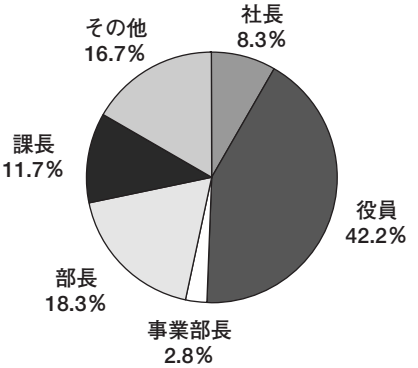
図⑴ー1　回答者が勤務している業種（n＝169）



⑴ー2　回答者の役職

回答者の役職は，図⑴－2のとおりあった。経営者の一翼を担っていると考えられる社長と役員を加えた割合が50.5%と約半数にのぼり専修大学OBがビジネス界で活躍している様子がみてとれる。また，回答内容もトップとしての意見とミドルとしての意見の両方が含まれている。

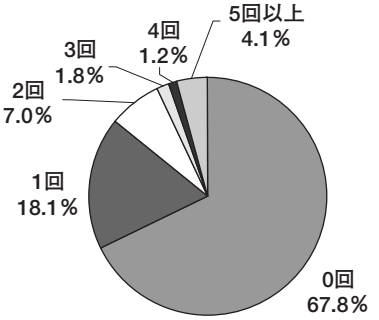
図(1)－2　回答者の役職（n＝180）



(1)－3　回答者の転職回数

回答者の転職回数により，回答内容が変わることが考えられる。転職がなければ，企業特殊的な能力を培われるからである。また，近年雇用の流動化が叫ばれており，キャリアアップを果たすための転職の影響を調査するため，回答者の転職回数を調査したところ，図(1)－3のとおりであった。実に7割近くのOBが転職せず，最初に就職したところでキャリアを積み重ねている様子がみてとれる。出世をするためには，このデータから転職はしないほうが良いと考えられる。平均では0.76回（標準偏差は1.781）であった。

図(1)－3　回答者の転職回数（n＝171）



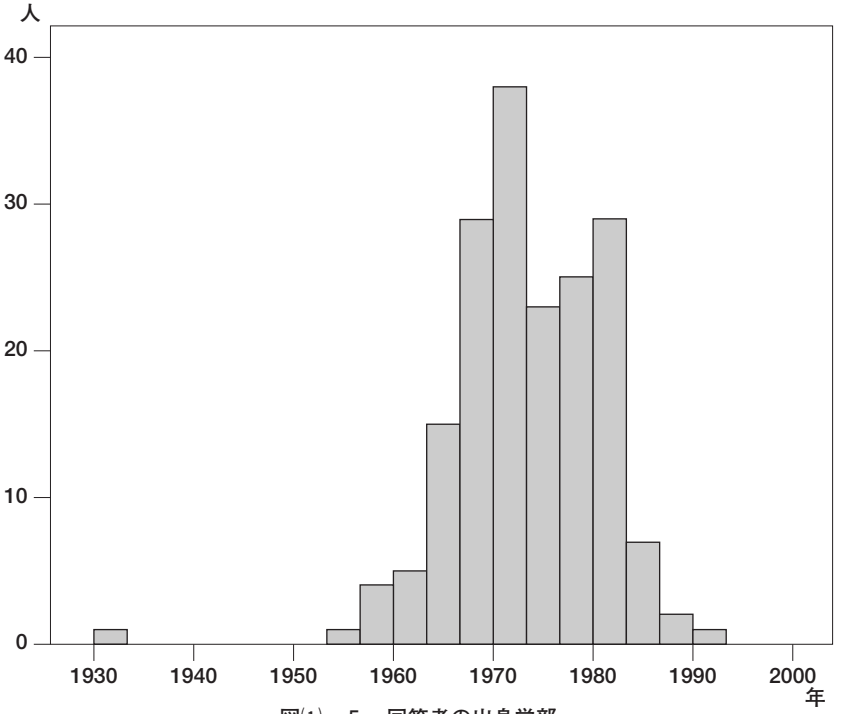
(1)－4　回答者の卒業年と出身学部

回答者の卒業年は，図(1)－4のとおりである。概ね1965年から1980年卒業

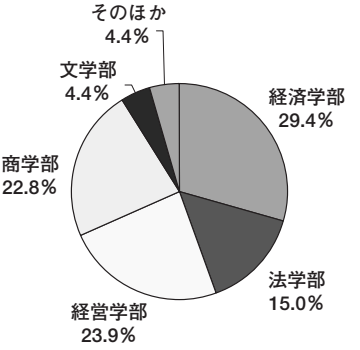
(47，8歳から62，3歳）が回答者の主力である。

また，回答者の出身学部は，図(1)－5のとおりであった。最も多かったのが経済学部の29.4%，次いで経営学部の23.9%，商学部の22.8%と続き，経済

図(1)－4　回答者の卒業年



図(1)－5　回答者の出身学部



系三学部で 76.1% を占めた。

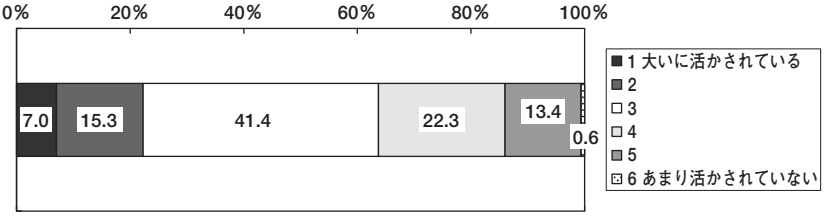
⑵　専修大学の貢献

定量データにより測定しようとした内容は，専修大学在学中に OB がどのようなことを学んだかを調査した「⑵専修大学の貢献」，ついで卒業後にどのようなことを学んだのかを調査した「⑶専修大学を卒業後に学んだもの」，そのような経験を踏まえ，現在の学生へのアドバイスを調査した「⑷専修大学の学生へのアドバイス」，そして今後の専修大学経営学部のカリキュラムを考える上で参考情報となる「⑸今，専修大学経営学部で学びたいもの」に分かれる。

⑵―１　専修大学で学んだことの影響

最初に，卒業生がキャリアを構築した際，専修大学の直接的貢献の測定結果をみることとしたい。「あなたの現在の地位を築くにあたり，専修大学で学んだことは，どの程度活かされましたか。」という質問に対して，「大いに活かされている」から「あまり活かされていない」まで１から６の６段階で聞いてみた。その結果，平均 3.22，標準偏差 1.100 で図⑵－１のとおりの分布となった。専修大学で学んだことを肯定する意見（スコア１，２，３）が 62.9% にのぼり，半数以上が現在の地位を築くにあたり，専修大学で学んだことを肯定的に捉えており，大学教育がキャリア形成に役立っている様子が伺える。

図⑵―１　専修大学で学んだことの影響（n＝157）

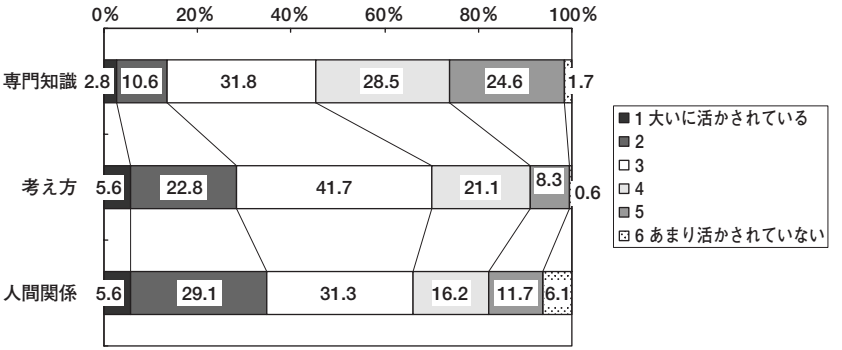


⑵―２　専修大学で学んだものの影響

次に，専修大学で学んだもののうち，どのようなものが，現在活かされてい

るかについて，Katz（1955）の分類に従い調査した。アンケート回答者がわかりやすいように，便宜上，テクニカルスキルについては「専門知識」，概念スキルについては「考え方」，ヒューマンスキルについては「人間関係」，と置き換えた。そして「専修大学で学んだものが現在，活かされていますか。」について，「大いに活かされている」から「あまり活かされていない」までの１から６の６段階でそれぞれの能力について調査した。その結果，「専門知識」については，平均3.66（標準偏差1.096，n＝179），「考え方」については平均3.06（標準偏差1.023，n＝180），「人間関係」については平均3.18（標準偏差1.294，n＝179）であり，図⑵－２のような分布となった。卒業生が専修大学で学んだもののうち，今までの地位を築くにあたり，活かされたもの（スコア１，２，３の割合）は，「考え方」が一番多い。実に，70.1％もの方がそれを積極的に活かしている様子がみてとれる。次いで「人間関係」（66.0％），そして専門知識（45.27％）となっている。専修大学は現在21世紀ビジョンとして，「社会知性の開発」を掲げているが，キャリア構築に成功した卒業生は見事に社会知性を開発していたことになろう。

図⑵－２　専修大学で学んだものの影響（具体的項目）

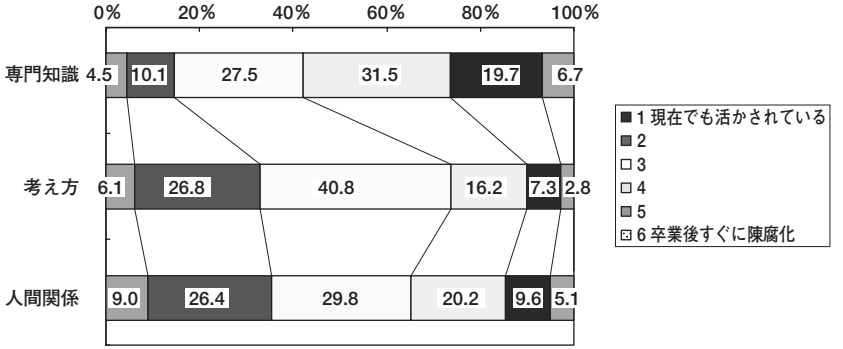


⑵－３　専修大学で学んだものの寿命

キャリア構築は長期間にわたるものである一方，大学教育はわずか４年間である。そのため，大学教育の効果がキャリア構築に影響を与えないのは，効果

の持続性（学んだものの寿命）に関連があるのではないかと考えられる。そこで「専修大学で学んだものが卒業後どの程度の期間役立ちましたか」について先ほどの専門知識，考え方，人間関係それぞれの能力について「現在でも活かされている」から「卒業後すぐに陳腐化」まで1から6の6段階で調査した。その結果，専門知識については平均3.72（標準偏差1.217，n＝178），考え方については平均3.00（標準偏差1.107，n＝179），人間関係については平均3.10（標準偏差1.289，n＝178）となり，図⑵－3のような分布となった。3つの能力のうち，現在でももっとも活かされているもの（スコア1，2，3）は，考え方であり，73.7％にものぼる。次いで，人間関係（65.2％），専門知識（42.1％）となっている。大学で学んだものの寿命が長いからこそ，現在までのキャリアアップに影響を及ぼしているといえる。大学としては今のことを教えることも重要であるが，それがどのように変化していくかを伝えることの方がより重要であろう。

図⑵－3　学んだものの寿命



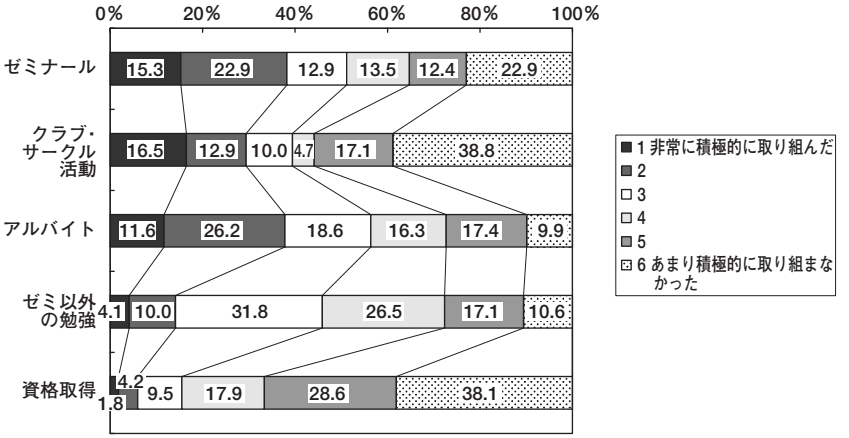
⑵－4　学生時代の取り組み

それでは，キャリアアップを果たした人はどのような学生時代を送っていたのだろうか。キャリアアップを果たせた人が学生時代に何に取り組んでいたかを調査し，学生時代の取り組みと将来の成功の因果関係を見るために，まず，学生の主要な活動である，ゼミナール，クラブ・サークル活動，アルバイト，

ゼミ以外の勉学，資格取得の５活動の取り組みについて，「あなたは学生時代，それぞれの活動に対してどの程度積極的に取り組みましたか」について「非常に積極的に取り組んだ」から「あまり積極的に取り組まなかった」まで１から６の６段階で調査した。

その結果，ゼミナールについては平均3.54（標準偏差1.808，n＝170），クラブ・サークル活動は，平均4.09（標準偏差1.959，n＝170），アルバイトは，平均3.31（標準偏差1.547，n＝172），ゼミ以外の勉学は，平均3.74（標準偏差1.275，n＝170），資格取得は，平均4.82（標準偏差1.256，n＝168）となり，図⑵－４のような分布となった。ゼミナールとクラブ・サークル活動は積極的に取り組んだ人がいる反面，そうでない人もいる。一方，アルバイトは比較的多くの方々が経験されている。反面，資格取得はあまり積極的ではなかった。出世した人の置かれた状況により異なることがうかがえる。

図⑵－４　学生時代の取り組み



⑵－５　学生時代に学んだものと打ち込んだものの関係

学生時代に何に打ち込めば，長期にわたり学んだものが活かせるのであろうか。これを調査するために，⑵－３の項目と⑵－４の項目の相関関係をみてみた。その結果が表⑵－５である。

勉学や資格への取り組み具合と専門知識の活用度合いの関係は，ゼミナールの場合，0.256，ゼミ以外の勉強の場合，0.249，資格取得の場合，0.331 といずれも高い相関係数を示しており，現在も通用する専門知識を身につけている傾向にあるといえる。また，クラブ・サークル活動の取り組み具合と人間関係の活用度合いの関係は，0.296 と高い相関係数を示しており，現在でも通用する人間関係能力を身につけている傾向にある。アルバイトについては，いずれの能力とも関係が見られなかった。知識は現在まであまり通用していないが，学生時代に生きた専門知識を身につける機会に恵まれた人は，現在でも通用しているといえよう。一方，集団活動の経験は人間関係スキルの醸成に大きく貢献しており，そのような場を設ける必要性が示されている。また，アルバイトの経験は本人の活かし方次第であり，無目的なアルバイトは，キャリアアップにはつながっていないと考えられる。

表⑵ー５　学んだものと学生時代に打ち込んだものの相関関係

	ゼミナール	クラブ・サークル活動	アルバイト	ゼミ以外の勉強	資格取得
専門知識	0.256**	0.122	−0.089	0.249**	0.331**
考え方	0.170*	0.152*	−0.038	0.295**	0.184*
人間関係	0.112	0.296**	0.000	0.211**	0.060

値は相関係数　**　１％水準で有意，*　５％水準で有意

⑶　専修大学卒業後に学んだもの

専修大学を卒業後に学んだものは，どの程度キャリア構築に影響を及ぼしているのであろうか。本章では，卒業後の影響にいて述べていくこととする。

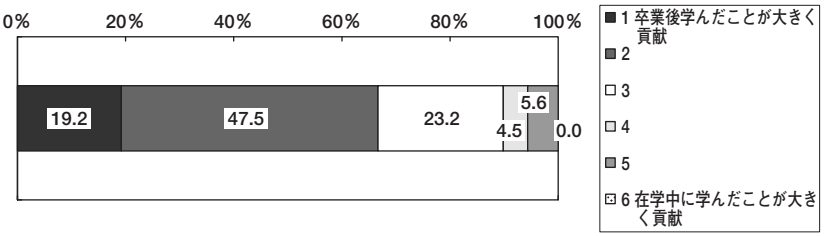
⑶ー１　卒業後に学んだもの

現在の地位を築くにあたり，大学時代に学ぶことと卒業後学ぶことの割合を調査し，大学の直接的な貢献がどの程度かを調査した。卒業後に学んだことの影響について，「卒業してから学んだことと，在学中に学んだことはどちらが大きく貢献していますか。」に対して「卒業後に学んだことが大きく貢献」か

ら「在学中に学んだことが大きく貢献」まで1から6の6段階で聞いてみた。その結果，平均2.30（標準偏差1.014）で図(3)－1のような分布となった。

卒業後に学んだことがより大きな人（スコア1，2，3）は，89.9%と社会人になってから学んだことの多さを物語っている。キャリアアップのためには大学教育は直接的な効果は相対的に少ないが，間接的な効果を狙った教育を目指すことが重要と考えられる。

図(3)－1　卒業後に学んだこと（n＝177）

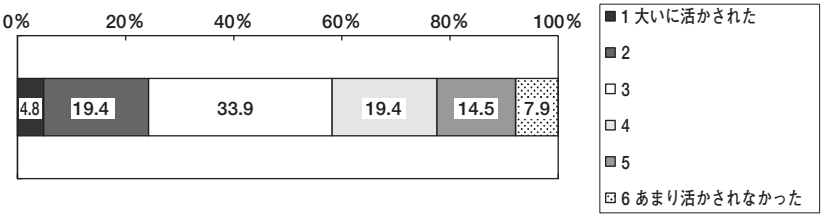


(3)－2　在学中の経験の影響

そこでキャリアアップを果たすにあたり，在学中の経験が，社会人になってから学ぶことの基盤になっているかについて調査した。すなわち，「それらのことを学ぶにあたり，在学中の経験が活かされましたか」という項目について「大いに活かされた」から「あまり活かされなかった」まで1から6の6段階で聞いてみたところ，平均3.43（標準偏差1.303）で図(3)－2のような分布となった。

在学中に学んだことの基盤のうえに，多くの社会人になってから学ぶことができたことを裏付けるように，学んだことを活かした（スコア1，2，3）ものの

図(3)－2　在学中の経験の影響（n＝165）



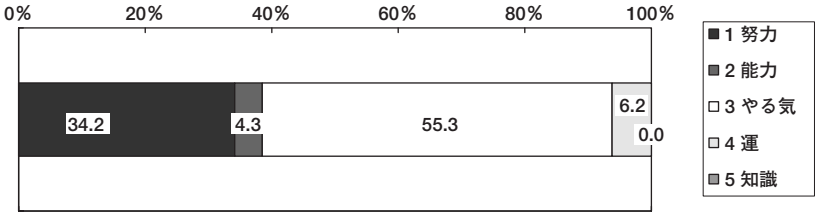
割合は，58.1％と半分を超えている。キャリアアップに向けた大学教育の直接的，間接的な影響が見て取れる。

⑶―３　キャリアアップを果たせない人の特徴

キャリアアップを実現できないのは，何が不足しているのであろうか。キャリアアップに必要なものを成功した人に評価していただき，キャリアアップに必要なものを探索してみた。「同世代の中でキャリアアップを果たせていない人たちをみて，自分とどこがもっとも違うとお考えですか。」というアンケートに対して，①努力，②能力，③やる気，④運，⑤知識の５つの要素から聞いてみたところ，図⑶－３のような分布となった。

キャリアアップを図れない理由として最も大きなものは，やる気（55.3％），努力（34.2％）があげられている。キャリアアップが果たせない理由として，知識のなさは０％と，全く関係ないと考えている様子がわかる。この結果から，本人次第でキャリアアップを実現することできると思われる。

図⑶―３　キャリアアップを果たせないひとの特徴（n＝161）



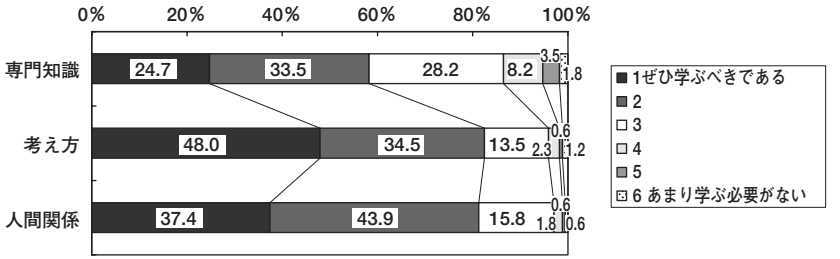
⑷　専修大学の学生へのアドバイス

キャリアアップを実現させたOBが学生に対してどのようなアドバイスを送るのであろうか。これを調査することにより，成功要因を探ることができるとともに，キャリアアップに向けた大学教育の方向性や重点を明らかにしようとした。そこで「将来のキャリアアップを果たすためには，今の学生は何を在学中に学ぶべきであるとお考えでしょうか。」というアンケートに対して，3．で用いた３つの能力それぞれについて「ぜひ学ぶべきである」から「あまり学ぶ

必要がない」について1から6の6段階で聞いてみたところ，専門知識については平均2.38（標準偏差1.151，n＝170），考え方については平均1.77（標準偏差0.948，n＝171），人間関係については平均1.86（標準偏差0.856，n＝171）で図(4)のような分布となった。

総じて，すべての項目を必要と考えているが，これまでの回答を反映させて，考え方を学ぶべきである（スコア1，2）としている回答が82.5%にも及んでいる。単に知識を教える場としての大学ではなく，それを用いて，考え方を学び，グループワークや教員とのコミュニケーションから人間関係スキルを学ぶことの重要性を示した結果と言えよう。

図(4)　学生が在学中に学ぶべきもの

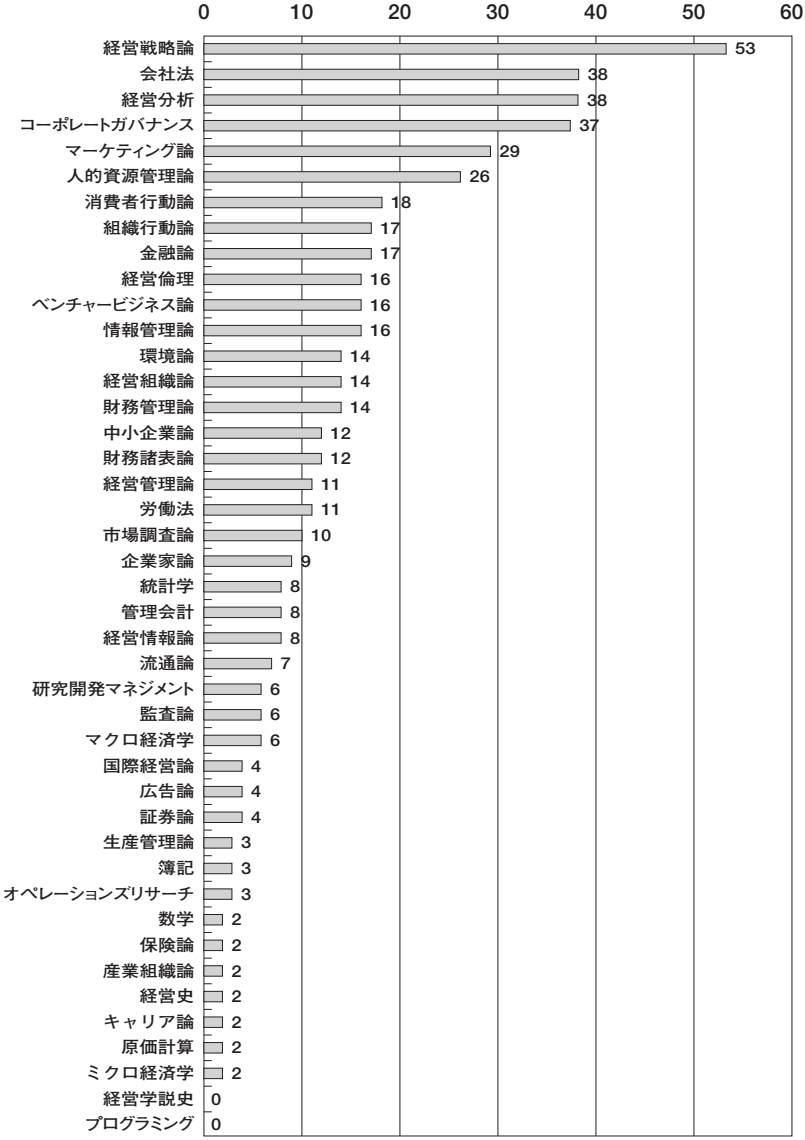


(5)　今専修大学経営学部で学びたいもの

最後に，専修大学経営学部のカリキュラムを考える上で参考情報となる，現在の専修大学経営学部で学びたいものについて調査した。「今あなたが，専修大学経営学部で講義をうけることができるとしたら，何を学びたいですか。」というアンケートに対して，43科目（末尾付録参照）の中から3つを回答していただいた。その結果，図(5)のようになった。

最もニーズが高かったのが53ポイント獲得した「経営戦略論」次いで時代を反映させた「会社法」，「経営分析」「コーポレートガバナンス」「マーケティング論」「人的資源管理論」と続いた。現実の学問体系や関連科目，科目の目的などによって大学のカリキュラムは作られるため，これらの意見も参考にしながら，今後を考えていくこととしたい。

図(5)　今受けてみたい講義（n＝173）



(6) まとめ

今回の調査報告書は定量データのみを取り上げ，主として一次集計を行った。これからより詳細な分析を行い，貴重なデータを活かしていくこととした。また，今後定性データの分析をすすめるとともにインタビューも行い，調査を深め，キャリアアップを図る要因，専修大学の役割，専修大学がこれから何をすべきかについて明らかにしていきたい。

注

1　ダイヤモンド『上場会社職員録』,『未上場会社職員録』2005 年版

2　内容に関しては，付録のアンケート票を参照。

参考文献

Aeker, David A., V. Kumar, & George S. Day, *Marketing Research*, *8th edition,* John Wiley & Sons, 2004.

Katz, R. L. “Skills of an Effective Administrator,” *Harvard Business Review,* 33(1), pp. 33–42, 1955.

＊アンケート調査及び本文章は，平成 17 年度経営研究所研究補助金に対する成果の一部である。

付録：アンケート票

専修大学の貢献と今後の発展に関するアンケート調査

専修大学経営研究所　特別プロジェクト

回答方法については，特に指定のない限り，スケール上の該当番号に直接○印をお付けください。 ［例］　専修大学で学んで良かったと思いますか。 　　非常に良かったと思う　　1－2－③－4－5－6　全く思わない

1．専修大学の貢献

1－1　あなたの現在の地位を築くにあたり，専修大学で学んだことは，どの程度活かされましたか。

大いに活かされている　1－2－3－4－5－6　あまり活かされていない

1－2　専修大学で学んだものが現在，活かされていますか。それぞれについてお答えください。

①専門知識

大いに活かされている　1－2－3－4－5－6　あまり活かされていない

②考え方

大いに活かされている　1－2－3－4－5－6　あまり活かされていない

③人間関係

大いに活かされている　1－2－3－4－5－6　あまり活かされていない

④その他学んだことで何が活かされていますか。以下に自由にご記入ください。

〔　　〕

1－3　専修大学で学んだものが卒業後どの程度の期間役立ちましたか。それぞれについてお答えください。

①専門知識

現在でも活かされている　1－2－3－4－5－6　卒業後すぐに陳腐化

②考え方

現在でも活かされている　1－2－3－4－5－6　卒業後すぐに陳腐化

③人間関係

現在でも活かされている　1－2－3－4－5－6　卒業後すぐに陳腐化

1－4　あなたは学生時代，それぞれの活動に対してどの程度積極的に取り組みましたか。

	非常に積極的に取り組んだ　　あまり積極的に取り組まなかった
①ゼミナール	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
②クラブ・サークル活動	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
③アルバイト	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
④ゼミ以外の勉学	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6
⑤資格取得	1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6

2. 専修大学卒業後に学んだもの

2－1　現在の地位を築くにあたり，卒業してから学んだことと，在学中に学んだことはどちらが大きく貢献していますか。

卒業後に学んだことが大きく貢献　　在学中に学んだことが大きく貢献

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6

2－2　卒業後に学んだことはどのようなことですか。以下に自由にご記入ください。

〔　　〕

2－3　それらのことを学ぶにあたり，在学中の経験が活かされましたか。

大いに活かされた　1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6　あまり活かされなかった

2－4　同世代の中でキャリアアップを果たせていない人たちをみて，自分とどこがもっとも違うとお考えですか。（　）の中に数字を１つご記入ください。

（　　）

①努力　②能力　③やる気　④運　⑤知識

3. リーダーシップのあり方

3－1　変化の時代のリーダーシップで必要なこととは何でしょうか。

〔　　〕

3－2　リーダーシップをとるにあたり，最も気をつけていることは何でしょうか。

〔　　〕

4. 専修大学の学生へのアドバイス

4－1　将来のキャリアアップを果たすためには，今の学生は何を在学中に学ぶべきであるとお考えでしょうか。

①専門知識をぜひ学ぶべきである　　専門知識はあまり学ぶ必要がない

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6

②考え方をぜひ学ぶべきである　　考え方はあまり学ぶ必要がない

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6

③人間関係スキルを　　人間関係スキルは

ぜひ学ぶべきである　　あまり学ぶ必要がない

1 － 2 － 3 － 4 － 5 － 6

4－2　専修大学の現在の学生に何を学んで欲しいと思いますか。以下に自由にご記入ください。

〔　　〕

5. 専修大学へのアドバイス

5－1　専修大学に対して何かアドバイスはございませんでしょうか。以下に自由にご記入ください。

〔　　〕

5－2　専修大学の教員に対して何かアドバイスはございませんでしょうか。ご自由にご記入ください。

〔　　〕

6. 最後にご記入者についてお伺いいたします。

6－1　お勤めの業種はどのようなものでしょうか。（　）内に該当する数字を１つご記入ください。

①農林水産業　②建設業　③製造業　④金融，保険業　⑤不動産業

⑥電気・ガス・水道　⑧サービス業　⑨専門サービス業(税理士，会計士など)
⑩その他
(　　)

6－2　お役職はどのようなものでしょうか。(　) 内に該当する数字を1つご記入ください。
①社長　②役員　③事業部長　④部長　⑤課長　⑥その他
(　　)

6－3　転職回数は何回でしょうか。(　) に数字をご記入ください。
(　　) 回　※転職経験がない場合は，0とご記入ください。

6－4　卒業年度と学部をお答えください。
西暦 (　　) 年　(　　) 学部卒業

6－5　今あなたが，専修大学経営学部の講義を受けることができるとしたら，何を学びたいですか。以下のテーマから3つ選び，(　　) に数字をご記入ください。

(　　) (　　) (　　)

1. 数学　2. 統計学　3. 会社法　4. 労働法　5. マクロ経済学
6. ミクロ経済学　7. コーポレートガバナンス　8. 金融論　9. 証券論
10. 保険論　11. 産業組織論　12. 環境論　13. 経営倫理　14. 経営学説史
15. ベンチャービジネス論　16. 経営史　17. 経営管理論　18. 経営組織論
19. 経営戦略論　20. 企業家論　21. 中小企業論　22. 研究開発マネジメント
23. 国際経営論　24. 生産管理論　25. 財務管理論　26. 組織行動論
27. キャリア論　28. 人的資源管理論　29. 簿記　30. 経営分析
31. 財務諸表論　32. 原価計算　33. 管理会計　34. 監査論 35. 流通論
36. マーケティング論　37. 市場調査論　38. 消費者行動論　39. 広告論
40. 経営情報論　41. オペレーションズリサーチ　42. 情報管理論
43. プログラミング

今後の調査の参考と致しますので，ご感想等ございましたら余白にお書きください。

現在，当特別プロジェクトでは，このようなアンケートによる全体的な傾向を把握することと共に，更なる詳しい聞き取り調査も計画しております。もし，調査にご協力の意思がございましたら，お教えください。

(　　)　1．協力します　2．時間が合えば協力します　3．今回は協力いたしかねます

ご連絡先（電話・e－メール等）　：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

調査結果をお送りいたしますので，お名前，ご送付先住所をご記入ください。

なお個人名は一切公表いたしません。

お名前　：＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ご住所　〒＿＿＿－＿＿＿　＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

お忙しい中，ご協力，まことにありがとうございました。